

『懐溜諸屑』から見る江戸の絵双紙屋 (要旨)

大久保 純 一*

国立歴史民俗博物館が所蔵する『懐溜諸屑』には、引札や寄席の半券、商品の包み紙など、江戸時代末期のさまざまな一枚刷が貼り込まれ、さながら江戸の庶民文化のタイムマシンの観がある(同資料に収録される全資料は、国立歴史民俗博物館のデータベースに公開されている)。その中には、浮世絵や草双紙を出版、あるいは販売していた絵双紙屋の引札や掛紙も相当な点数見出せる。

引札は商家や興行体の宣伝ビラなので、絵双紙屋の引札だと取り扱う商品が記されているのは当然だが、顧客が購入した錦絵を丸めて筒状にして持ち帰る際に、手で持つ部分に巻き付ける掛紙にも、その店の扱う主な商品や店の位置する場所などが記されていることが多い。それらは印刷された当時において消耗品であったために、今日に残るものはきわめて希であるが、江戸の出版文化を考える上での貴重な資料となりうる。

たとえば、広重の「名所江戸百景」の版元としても知られる魚屋栄吉の掛紙からは、魚栄の読みが通説の「うおや」では無く、「さかなや」であること、版元に転じる前の業種が魚屋ではなく、古本商であったことが判明する。

江戸の絵双紙屋が錦絵や草双紙などの大衆的印刷物の他に、葉なども販売していたことは、草双紙の作中、あるいは巻末の広告などでうかがうことができるが、引札や掛紙からはより詳細にその内容を知ることができる。

具足屋嘉兵衛のように、小間物を扱っているこ

とを掛紙に明記している店もあるが、目立って多いのが葉を扱う絵双紙屋である。白粉の仙女香を扱う絵双紙屋が多かったことはよく知られているが、「乳の出る葉」の売弘所となっていた川口宇兵衛の引札や、目葉、声の葉など複数種類の葉を掛紙に記す伊賀屋勘右衛門など、『懐溜諸屑』中にもいくつかの例を見いだすことができる。なかでも、古賀屋勝五郎の引札は多色刷の美しい仕立てで、本業としてきた錦絵の他に、あらたに美顔葉など複数種類の葉を売り出すことを宣伝している。川口屋や古賀屋など、葉だけの引札をつくる絵双紙屋の例を見ると、その営業利益の中で、葉類がすくなからぬ比率を占めていたことがうかがえるであろう。

しかしながら、絵双紙屋、とくに版元業を行っていた店の光景を描く錦絵や挿絵は少なからず知られているものの、店頭で描かれるのは錦絵や草双紙などの出版物ばかりで、葉や小間物などを描く図は知られていなかった。そうした商品は絵になりにくいといった事情もあるだろう。

そうした中で、『懐溜諸屑』に収録されるものではないが、二代歌川国貞の錦絵三枚続は、さまざまな絵付けをした猪口を所狭しと並べた絵双紙屋の増田屋銀次郎の店頭風景を描く珍しい作例であるといえる。

『懐溜諸屑』に貼り込まれた絵双紙屋の掛紙の中には、出版をおこなったことのない小売り専門の店のものもいくつか見出される。出版をおこなった、いわゆる地本問屋系の絵双紙屋については、各種の記録からその活動時期や店のあった場

*国立歴史民俗博物館教授、総合研究大学院大学教授

所など、ある程度の情報を得ることができるが、小売り専門の店に関しては、ほとんどそうした情報を得ることができない。江戸市中にそうした零細な絵双紙屋は相当な数あったと考えられているが、『懐溜諸屑』からその一端が垣間見えることは貴重である。